

# 観自在

弘長寺寺報  
第二十二号  
平成二十二年  
二月

## 弘長寺は開闢（かいびやく）（創建） 七百五十周年を迎えます

（意識を変える時節の到来です）

弘長寺住職 森田裕光

明けましておめでとございます。

本年一月末日開催、第一回本堂耐震修築建設委員会（参与者含む）の意向を紙面に載せたくて二十号の発刊が遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。

検討委員会の上程議題（早急に着工すべし）を受け、昨年九月に護持会臨時地区委員会を開催しました。

その席で住職は、「お檀家様のご負担が続いたので、しばらく休息期間を設けたい」との意向をお話申し上げ、了承を得ました。

その後、そのことに対して様々なご意見やお叱りを賜りました。

○本堂築後二百四十年も経ち、しかも瓦と土のものすごい重量を支える屋根裏（小屋裏）が誠にお粗末で危険な状態であることを考えれば、一刻の猶予もないということをもっと切実に捉えるべきだ。

○景気は心配ではあるが、景気の回復などを待っていたら、永久に修築など出来ない可能性も出てくる。

また、景気が良くなれば物価や建設費（資材含む）や利子も同じように上昇するのだから、景気という言葉にそれほどとらわれなくともよい。

○本堂はまだ使える建物を全て壊して、ぜいたくに新築するのではない、危険な建物に対する最低限の修築なのだ、お寺を護る者として最低限の義務を、景気によってではなく信仰心で果たすべきだ。等の力強い心情や思いが寄せられ、住職も意識を変えました。

第一回建設委員会では、諸々の意見・質疑の後、「やはり早期に着工すべきである」との結論で全員の賛同を得ました。次回開催予定の第二回建設委員会の後で、皆さま方に具体的にお願ひ文を出したいと思っておりますので、どうかご理解ご協力をお願ひ申し上げます。

三年後に、開闢七百五十周年を迎えます。（1263年創建）このように長い歴史と、確かで誇り高い由緒を持ち併せたお寺は、極めて稀だと思います。（本号に由来碑文を載せています）

そろそろ決断の時期だよと、仏様が「弘長禅寺開闢七百五十回御遠忌」という記念すべき贈りもので、後押しをされているような気がしています。

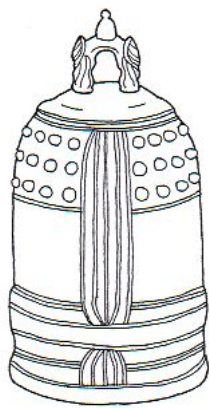


十月二十三日、本寺洞光寺様、そして阿弥陀坐像の作者である秀英和尚の観音寺・蓮光寺、實庵和尚様の足跡を辿り弘安寺様・日光寺様、そして十四泰仙大和尚様の実家である木次町の梶田家を訪問し、弘長寺の歴史の重みをずっしりと実感した研修旅行でした。

（写真は洞光寺様本堂前にて）



死は現世での一現象であり、生は以前にもあったのであり、これからは後にも生が現れてくるのであり、仏法の現中では、生と見えるけれども不生であり不滅であるとも述べられています。滅が来たれば素直に滅に向かつて進むがよい。それを厭うのでもなく、願うこともいらぬ。ただそのままであれ、そのままであれ、とお示しで「日本教文社刊「正法眼蔵を読む」」



私たちの先祖代々の御霊が祀られていた善提寺であり、そして我々の子孫に残す宝とも云うべき善提寺の堂閣を、既に仏であるとして、えたいたく私たちが、今、成し遂げることで、千載一遇のチャンスと捉え、この大業を是非とも完遂してまいります。

ときあたかも、今年から三年後の平成二十五年が、弘長寺創建の弘長三年（一

二六三年）から七五〇年、さらに当山本堂が再建された安永二年（一七七三年）から二四〇年のきわめて得難い節目の年に当たります。

この今に生かされていることは「奇跡」であり「不思議」な存在であると思いませんか。感謝の心が湧いてまいります。不景気と考える経済的な世情だからこそ「四無量心」即ち「慈悲喜捨」の深い心で「捨徳」を積み重ねてまいりたいものです。実践してまいります。

愈々檀家皆さまの格別のご理解ご協力をたまわりますようお願いを申し上げます。新年の挨拶といたします。

ありがとうございます。合掌

寺族通信教育研修会に参加して

寺族 森田春美

十一月四日（六日）（二泊三日）曹洞宗宗務庁に於いて「寺族通信教育研修会」が行われ、参加しました。

この研修は年に三回のレポート提出と一回のスクーリングに出席して、修了認定を受け

得ることによって様々な資格が得られるというものです。寺族第二宗務所からは数名の希望者が申し込みされたので、十一月研修会に参加しました。一人だけではない、東京の土地勘も浅く、初めの宗務庁というところで、不安が一杯だったのですが、何とかどおり着きました。何と全国各地から三十名が集まり、一人参加の方が多く、友達にたくさんの方が多かったです。友達になり、ホッとしました。

受講内容は、三日間みっちり予定が組んであったのですが、丁寧な講義と親切な指導、又グループの方々がたのしい方ばかりで、疲れも忘れて楽しく過ごすことができました。この場で受けた講義は、今後の私の寺族としての生活に大変役立つと確信しました。

合掌



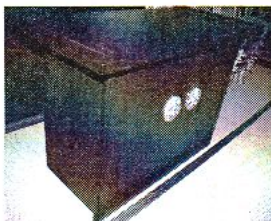
グループの方たちと五階研修道場にて

お知らせ お願い

●ストリーブ・説教台をご喜捨いただきました。

本堂に大型ファンヒーター・ストリーブと梅花講習も可能な説教台を喜捨していただきました。

●施主は浜西・屋号酒田屋坂本金子氏です。直心勝道居士霊位菩提の為。



☆再掲載致します

●住職もサラリーマンです

「坊主丸儲け」という言葉は遠い過去のお話で、現在では全く当てはまりません。

弘長寺は宗教法人なので法人管理の下で運営しております。

住職は法人から適当と思われる給料をいただいています。

法人の会計は、年に一度、責任役員方（土江嘉久氏・仲田克美氏・武田民三氏）の厳正な監査があります。

監査時に布施収入の額などはその通りに記載していますが、個人名は人権に触れるため伏せています。

時々税務署の調査が入りますので、いい加減な会計はできません。

お知らせ

お願い

●建設委員会参与者選出

●建設委員会参与者選出  
昨年の護持会臨時地区委員会の場で規約改正があり、本堂耐震修築建設委員は、地区委員の他に住職指名による参与者を数名加えることとなり、左記の八名が選出され、参与者となられましたので、よろしくお願いいたします。

中垣：土江嘉久、宍道：仲田克美、浜東：伊藤清志、小松：伊藤隆庸、大森：吉岡誠一、小松：伊藤順朗、横見：石富 修、浜西：土江彰一

●本年十月に弘長寺独自の研修旅行をいたしますので、是非ご参加下さい

●本年十月に弘長寺独自の研修旅行をいたしますので、是非ご参加下さい  
本年十月十三日(水)～十五日(金)の三日間です。

JR↓新幹線↓可睡齊にて一泊(曹洞宗寺院・秋葉三尺坊大権現総本殿：大聖東堂様が修行をされた寺)↓バス↓小田原・大雄山最乗寺(道了尊)↓箱根観光↓箱根温泉一泊↓鎌倉観光↓羽田↓出雲空港着 以上の予定です。

「火防の神」総本殿として、また家康親子を和尚が救ったお寺として有名な可睡齊への研修です、詳細は次号で。

●消防関係の方も是非ご参加下さい。

●今年の本山参拝は永平寺様です  
平成二十二年六月八日(火)～十日(木)  
会費 四万九千五百円  
申し込み締切  
四月三十日(金)  
申し込み金五千円  
を添えてお寺まで

旅行日程(全行程バス)  
八日・各発地：永平寺(泊)  
九日・豊財院(国宝馬頭観音)  
：永光寺(五老峯)：和倉温泉(泊)  
十日・菅沼合掌集落(世界遺産)：各発地

●墓地が十分空いています

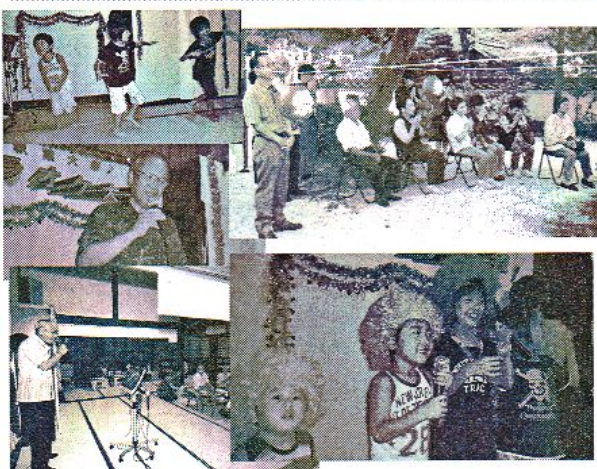
●墓地が十分空いています  
昨年八月に完成した墓地は即座に二十三区画(鏡地区の方が圧倒的に多いです)の申し込みをいただき、現在既に三区画に墓石が建立されています。  
お墓のお参りや掃除が楽になります。本当に良かったとお話になります。  
お墓が高所にあり、急坂で困っておられる方はどうぞお寺の墓地にお申し込み下さい。  
割(無利子)も受けておりますので安心してご相談下さい。  
※例 現在手元に資金が無くてもOK、三十五万円の区画ならば、四年分割で一月七千三百円になります。(但し支払いは一年分を一括で)

●秋葉大祭にお出かけ下さい

●秋葉大祭にお出かけ下さい  
毎年八月三十一日、午後六時から秋葉三尺坊大権現供養大祭を行っております。  
弘長寺地区「十和の会」から提灯二十個の喜捨をいただきました。  
昨年から読経供養祈願の後、カラオケ大会を始めました。  
お酒・つまみも準備し、専門カラオケ業者にセッティングしていただき、音質・音量とも抜群の本格的なカラオケ大会になりました。

大変好評でしたので、今年も同じように開催致します。  
秋葉三尺坊火難滅除のお札も差し上げます。

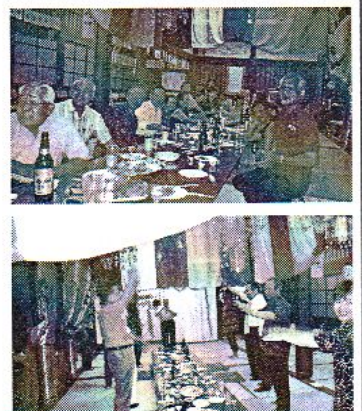
●昨年はおおかつたのですが、他地区の方も是非お出かけ下さい。



●第二教区護持会研修旅行

●第二教区護持会研修旅行  
十月十一日(月)～十三日(火)、一泊二日で第二教区護持会研修旅行が開催されました。  
当番は鞍馬寺様。  
豊竜寺様の本寺、龍文寺・瑠璃光寺等に拝登参拝。  
当山護持会より武田会長・坂本坂本副会長・石田事務局長と寺族、計四名参加。

●住職が参加の予定でしたが、檀務の為、寺族が代わって参加しました。  
龍文寺にて



お知らせ

弘長寺縁起由来碑を立てます、場所は山門前掲示板の隣です。  
 施主は弘長寺地区・屋号奥 石富 亨氏、現在ある掲示板も  
 先般お亡くなりになった御尊父・石富頼男氏の直捨です。

為 齋 岳 岳 限 印 十 職 立

## 弘長寺縁起由来碑

当山は鎌倉時代 弘長三年(一二六三年)、関東より赴任した地頭、藤原満資が、主君である北条時頼・重時の菩提を弔うため建立した。

満資自筆文書によれば、約六mの大阿弥陀如来像とその堂宇を造立し、田七町他広大な山野を寺院敷地として寄進、念仏僧三十名を居住させた。

寺院名の由来は、鎌倉時代の年号からつけられたものである。

現在は禅宗の曹洞宗(福井・永平寺、鶴見・総持寺両大本山)であるが、開創時は浄土宗と思われる。

当山に残る痕氏・碧信宗文書によれば、開創およそ百五十年後、實庵見貞大和尚(永享三年・一四三二年示寂)が、当山二世住職として教化布教の多大な実績を残したと記されている。

又、当山僧・宗順が奥出雲・三沢氏に宛てた書状が存在するが、實庵和尚は龜嵩・總光寺四世であり、同時に大東・弘安寺三世、奥出雲・日光寺開山も務め、広域に活躍された高僧であった。

その總光寺の開山・不見明見禅師は三沢氏二代目城主の息子で、後に曹洞宗大本山総持寺十九世に拝請された名僧であった。

故に、当山は實庵和尚を通じて十五世紀初頭(室町時代)より三沢氏との深い関わりを持ち、その当時から曹洞宗であった。

十七世紀末(江戸時代初期)、当山は尼子氏菩提寺である松江市・曹洞宗洞光寺の末寺となり、洞光寺二世天麟星壺大和尚を御開山として勸請し、現在まで連綿と法灯が継承されている。

弘長寺は、洞光寺末寺・二十四ヶ寺中の四門首(四本柱)の一つである。

鐘楼堂は、昭和六十年、人間国宝香取正彦氏設計・日光の材料・日光の宮大工によるもので、玉造・長楽園・故長谷川正司社長の一建立である。

平成十六年九月、阿弥陀堂(位牌堂)改築に合わせ阿弥陀如来坐像を修理した際、胎内より夥しい墨書や経筒等、極めて貴重な資料が発見された。

仏像は、玉湯・蓮光寺を兼務していた菅原・観音寺住職・秀英が天文三年(一五三四年・織田信長誕生年)に作製したものであり、墨書銘から宗道氏地頭・武士・僧俗等地域一丸となって平安祈願を込め制作したものと判明、同平成十六年十二月、宍道町(現在は松江市)有形文化財指定となった。

江戸時代初頭の阿弥陀堂に関しても文書が残っており、時の住職・薫浦和尚が阿弥陀堂の荒廢を嘆き、松江藩主・松平直政公に直訴懇願し、藩費で阿弥陀堂を再建したと記録されている。

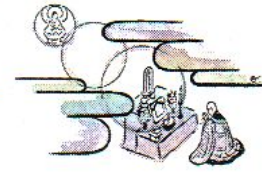
平成二十二年二月涅槃会吉日

十八世住職 大心裕光 謹記





の意味がは解らなくも預かりのすだだけでは、お預かりした方に對してあまりにも不親切です。



一言葉で見うるわしく聞こえる施行にかなっているの布

は「お何のらく布施をされた方

「相手が副住職であつたら、

「読経して上げたつた住職

疑問を持たれるはずで、

なく上は、するとお布施をした施主

私が施主だつたら、「預

「お預かり」という意味で

の相手が、何故僧を通過し

は僧が布施を直接受けるよ

を布施する人、物、清らかに

側も（仏様に）お布施する

が百%納得する、修行をす

なく、僧はいたるぬから全て仏

に、とは説いてないのです。

「お檀家様には、僧に帰

い（お檀家様にお供え）

依（お檀家様には、僧に帰

こととは同じ、僧に布施する

唱量際、又、僧が布施を受け取る



ないと言つてはなら

「有り難う」といふ意味は

有ること難し、

うお布施をもらつて有り難

難い気持ちがあるのです。

と申して「有り難う」といふ